

に、

神祇を崇び祭祀を重するは皇國の大典政教の基本なり

と仰せられてゐます。

神祇とは、單に神といふのと同じことであります。しかしこれを少し詳しくいへば、天神地祇を約した語であります。

天神は「てんじん」で、これを「あまつかみ」とよみ、天津神など、も書きま
す。地祇は「ちぎ」で、これを「くにつかみ」とよみ、國神又は國津神など、も
書きます。それで神祇といふときには、「神」の方は「あまつかみ」であり、
「祇」の方は「くにつかみ」であります。

では天神（あまつかみ）と地祇（くにつかみ）とは、どう異なるか。これには、
少しづつ異つた説もありますが、大體の常識としては、高天原にましませし神々
を天神と申し上げます。その代表的の神は、天照大御神様であらせられ、天孫御
降臨以前から、この國土にゐられた神々を地神と申し上げます。例へば大國主神

の如きは、地祇の代表的の神であらせられます。

明治天皇様の仰せられし如く、まことに、神を崇敬し、その神の祭祀を重んず
るといふことは、わが國神代よりの大典即ち重大なる國家の式典であり、政も教
へも、すべてはこれを基としてゐるのであります。

敬 神

敬神とは、神を敬ふといふことであります。わが國の神は、皇祖皇宗（皇祖は
天照大御神様で、皇宗は御代々の天皇様。この二つを一つに見奉つて、皇室の御
先祖様と解してもよろしい）と皇國のためにお盡しになつた偉い人々を、神とし
て、神社にお祭りしてあります。

又た、神社にお祭りしてある神の他に、私達の家の先祖は、みな神となるので
あります。佛教の方からいへば、佛ですが、日本の固有の思想、神道からいへば

神であります。

それで、敬神といへば、神社にお祭りしてある神も、自分の家の先祖もみんな敬ふことなのであります。そして、神社の神も、自分の家の先祖もみな大きく見れば、日本人の御先祖であります。ゆゑに、敬神といふことは即ち崇祖なのであります。崇祖とは、先祖を崇るといふことです。また別の言葉でいへば、祖先崇拜であり、神祇崇拜であります。

わが國は、敬神の國で、もしこの敬神といふことが衰へたならば、國の衰へともなります。

敬神尊皇

正しい敬神は、即ち尊皇であつて、敬神と尊皇とは、全く一つものであります。正しい敬神とは、一口に云へば無條件で神を崇敬するといふことであります。更

にこれを別言すれば、まことの心即ちまごころをもつて神を崇敬すること、これが正しい敬神であります。まごころとはいかなるものであるかといへば、それを極く碎いていふならば、私心なく、損得利害の觀念なき心であります。親が子を思ふ心は、まごころであつて、子を思ひ、子を愛するのに、損得利害といふ打算的な考へをもちません。我々日本人が、日本の神を崇敬するのは、それによつて、自分が幸福になれる、利益が得られるなど、いふ個人主義的利己主義的な考へからするのであつてはなりません。祈願するところは、たゞ皇國の降昌であつて、自分一己の利益や幸福を祈るが如きは、不純なる敬神であるといはねばなりません。

正しい敬神を離れたる尊皇や報國や忠誠はあり得ないのであります。敬神の歸一するところは、天照大御神様であります。わが國には神は數多あまたまし、その神を祭れる神社も、全國到る所にあつて、人々が自由に參拜できるやうになつてゐます。それで或る人が、或る神を特に崇敬してゐるといふことは、世間によく

見る例であります。しかしその或る神を崇敬することが、やがて天照大御神様を拜してゐるのであるといふことを、よく心得てをらねばなりません。どの神社に参拜しても、その神社の御祭神を拜むことを通して、天照大御神様を拜むことになるといふことを知つてをらねばなりません。もしさうでなかつたならば、それは正しい敬神ではないのであります。敬神の歸一するところは、天照大御神様にあります。

敬神が、天照大御神様に歸一すればこそ、敬神は即ち尊皇であり、報國であり、忠誠であり得るのであります。天皇様は天照大御神様の御延長で、大御神様と御一心御一體にまします。天照大御神様が天皇様であらせられます。ゆゑに天照大御神様を拜み奉ることは、天皇様を拜み奉ることとなるのであつて、かくて敬神即尊皇となるのであります。

尊皇、報國、忠誠は、日本人にとつて絶対無條件であります。敬神もまた日本人にとつて絶対無條件であります。自分の幸福や利益を祈願するやうな敬神は、

不純なる敬神であつて、尊皇、愛國、忠誠に反するものであるといはねばなりません。

皇大御神・皇大神・大御神・皇神・大神

皇大御神とは、天照大御神様の御事であります。その用例は、延喜式の祈年祭の祝詞の中に「皇大御神の見はるかします四方の國は」とあります。但、同じ延喜式の春日祭の祝詞の中に、春日の四座の神（健御賀豆智命、伊波比主命、天之子八根命、比賣神）に對して皇大御神といひ、また、石清水八幡宮、賀茂社、平野社等の御祭神にも、皇大御神といつた時代もあります。これは違例であつて皇大御神といふ神號は、天照大御神様のみに用ゐるべきものといふことが明かとなり、今では他の神々には用ゐられません。

皇大神といふ神號も、また天照大御神様のみに用ゐらるべきもので、皇大御神

と申すのと同義であります。

大御神おほみかみといふ用例は「古事記」に、天照大御神様には、必ず大御神と記し、また伊邪那岐大御神いざなみかみと記したのがあつて、他の神々には大神又は神と記してありませんが、たゞ一つ、

阿遲鉏高日子根神あぢしきたかひこねのみかみは、今、迦毛大御神かものおほみかみと謂まをす者かみなり。

と記してあります。阿遲鉏高日子根神は、大國主神の御子で、この神に對して、大御神といつたのは、いかなるわけか、よくは分りません。

要するに、昔は違例もありますが、今日では、皇大御神、皇大神、大御神の神號は、至高至尊の神にまします天照大御神様に對してのみ、用ゐる慣例となつてゐるものと申すべきであります。

次に皇神すめみかみといふのは、古くは總ての神々に用ゐられました。今日では、皇祖乃至御歴代の天皇様に用ゐられます。

大神おほみかみは、やはり尊嚴なる神に對して用ゐる神號で、「日本書紀」には、天照大

神と記して「御」の字が入つてゐません。しかし天照大御神様の場合に限つて、大神を「オホミカミ」と讀み奉り、他の場合は「オホカミ」と讀むべきであります。

皇御孫命

皇御孫命すめのみみこととは、天皇様の御事であります。皇祖は天照大御神様にまします。ゆゑに皇祖神すめのおやのみかみに對しまつりて、皇御孫命と申し上げ。ただし狭い意味では、天照大御神様の御孫にまします邇邇藝命ににのみのこと様の御事を申し上げますが、一般廣義には、天皇様の御事を申し上げますのであります。御孫みまとは、御子みこの御子、即ち御孫といふ意のみでなく、御子孫といふ意で、されば、邇邇藝命様より御代々の天皇様は、みな皇御孫命にましますのであります。

また、天皇様の御事を、天神御子あまつかみのみことも申し上げます。こゝに天神あまつかみといふのは、

天照大御神様の御事であつて、即ち天照大御神様の御子孫といふ意であります。

神漏伎命・神漏彌命

祈年祭の祝詞に

高天原に神留り坐す皇陸神漏伎命・神漏彌命以ちて、

とあります。神漏伎は、神呂岐とも、神魯企とも書かれ、神漏彌は、神漏美とも神魯美とも書かれます。

皇陸は「天皇の親しき」といふ意であり、神漏伎命と神漏彌命とは、これを一つにして皇祖神と解し奉つてよいかと思ひます。ゆゑに、皇陸神漏伎命・神漏彌命とは、「天皇のお親しき皇祖の神」と解し奉つてよろしい。但、神漏伎命・神漏彌命については諸説があります。一例をいへばこれを天照大御神様と高皇産靈神とを申し上げるのだとする説もあります。しかし私は、前述のやうに「皇祖神」

と解し奉つてよいと思ひます。

神宮

神宮と申し上げるのは、伊勢神宮の御事であります。普通世間の人々は、大神宮様なども申し上げてゐます。たゞ神宮と申し上げますと、橿原神宮とか、明治神宮とか、さういふ神宮といふ御社號のついた神社が、他にましますので、それと區別し奉るために、伊勢神宮とか、大神宮とかと、俗に申し上げてゐるのであります。しかし正式には、たゞ神宮と申し上げるのであります。

橿原神宮とか、明治神宮とか、その他、神宮といふ御社號のついてゐる神社は、神社の中で、一番社格の高い官幣大社であります。

ところが、神宮、即ち伊勢の神宮は、社格を超えた御宮で、絶対尊貴なのであります。ゆゑに、官幣大社といふ御社格はなく、その上にましますところの神宮

であります。

この神宮（伊勢神宮）には二つの御宮があります。即ち、

皇大神宮。

豊受大神宮。

であります。そして、皇大神宮を、世間では内宮と呼び奉り、豊受大神宮を外宮と呼び奉つてゐます。

皇大神宮は、宇治山田市の五十鈴川上に鎮座ましまし、豊受大神宮も、宇治山田市に鎮座しておいでになります。これは汽車の停車場（宇治山田驛）に近いところに在ります。

皇大神宮には、申し上げるまでもなく、天照大御神様がお祀りし奉つてあります。皇大神宮が、今のところに御創建せられましたのは、第十一代垂仁天皇様の二十六年であります。

天照大御神様は、大日靈貴尊とも、日大御神とも、日神とも申し上げ、また、

天照坐皇大御神など、も申し上げます。皇室の御先祖であらせられますから、皇祖と申し上げ、また天祖とも申し上げます。御父は伊弉諾尊であらせられ、御母は伊弉冉尊であらせられます。

大御神様の御徳は、最も高く、「光りうるはしく、世界に照り徹る」と、「日本書紀」に書いてあるほど、世界に光り輝く御徳と、御尊さともち給へる女神様であらせられます。

御代々の天皇様は、大御神様から一系におつゞき遊ばされ、天照大御神様と御一體御一心であらせられるのであります。これを萬世一系とも、皇統連綿とも申し上げます。

神武天皇様からでも二千六百餘年で、その以前、即ち、天照大御神様から神武天皇様までの間は、どれほどであつたかわかりません。それほど古く、神代の大昔から、天皇様、皇室が御本元となられ、御中心となられて、この日本國が生まれて來てゐるのであります。

かゝる萬世一系の天皇様を戴いてゐる國は、世界のどこにもありません。ゆるぎに日本を萬邦無比といふのであります。

豊受大神宮には、豊受大神とようけのみかみがお祀りし奉つてあります。この神様は、豊受姫命とようけのみかみ、豊宇氣毘賣神とようけのみかみなども申し上げます。

「古事記」によりますと、この神様は伊弉諾尊と伊弉冉尊の御孫であらせられます。即ちこの二神の御子に和久産巢日神わくすすびのみかみがましまし、この神様の御子が、豊受大神であらせられます。

この神様は、食物、農業、經濟の神様であらせられ、天照大御神様は日本人のために、五穂の種を、この神様より受けさせられ、それを陸田や水田に植ゑしめ給ふたのであります。

神宮の大 麻

伊勢神宮の大麻たいま（お札）は、「オホヌサ」といひ、毎年十月十五日から年末にかけて頒布されます。

この大麻頒布は、明治三十三年の勅令でお定めになつた神宮神部署といふ役所で扱はれ、全國へ頒布するには、都府縣廳などの援助の下に、各神社又は市町村役場などでも扱ひます。

大麻頒布のことは、明治五年、畏くも明治天皇様の御思召によつて、皇祖天照大御神様の御璽おたまとして、全國に頒布せらるゝことになつたのであります。つまり、神宮の大麻は、國民一般へ毎年拜受せしめよとの、尊い御趣旨によつたものでありまして、他の神社のお札とは、又た格段の相違があるのであります。

かく大麻を年末に拜受して、年の初めに新しいものと換取りかへをし、もつて、

清淨を尙ふ日本神道の大神を體得し、皇祖で國祖であらせらるゝ天照大御神様を、家庭においてお祭りし奉るのであります。

神 社

神社は、神をお祀りするために社殿等を設け、誰でも參拜し得るやうにされてゐる所であります。神社が造られた始まりは、遠く神代にあつて、奈良縣の大神神社、島根縣の出雲大社、兵庫縣の伊弉諾神社、福岡縣の宗像神社、長野縣の諏訪神社など（以上いづれも官幣大社）は、神代からの神社であると傳へられてゐます。

更にその以前からの起源をたづねますと、神籬磐境かみかきいはまかであります。神籬とは、神靈の鎮しづまり給ふものをいふので、今日では、神をお祀りするとき、神に紙や麻などをさげますが、この神籬も、神籬であつて、これに神靈が宿り給へるものとする

のであります。その他、玉、鏡、劍などを神籬とすることもあります。磐境とは祭場のことであります。神をお祀りする場所のことです。それで、神籬が神籬ならば、その神籬を載せた机が磐境であります。

この神籬磐境が、即ち神社であります。ただ社殿の設けがなかつたのであります。これから變遷して、社殿その他の建築物を備へた神社となつて來たのであります。

神社は、ジンジャ、又はジンシヤと音讀し、また訓讀してカミノヤシロともいひ、又オミヤ（お宮）、オヤシロ（お社）、或は單にミヤ、ヤシロとも呼びます。ミヤは御屋みやで、屋は宿舍のことで、神靈の宿り給ふところですから、尊んで御をつけてオミヤといふのであります。ヤシロは屋代やしろであつて、屋は前述の通りであり、代しろは屋の在る所といふ意であります。即ち苗代たしろなど、いふのと同じであつて、苗代とは、苗のある所といふ意であります。

社 格

神宮（伊勢神宮）以外の神社には社格があります。神宮のみは、社格を超越せる至上至高の神社であります。今日の社格制度は、古來からの制度に則して、明治四年に制定せられたのであります。社格は主として神社の歴史と祭神とによつて定められたもので、國家が神社に對してつけたところの待遇上の格式であります。そこで社格の上から神社を區別しますと、左の通りです。

一、神宮

二、官社

イ、官幣社

官幣大社

官幣中社

官幣小社

別格官幣社

ロ、國幣社

國幣大社

國幣中社

國幣小社

三、諸 社

府縣社

郷 社

村 社

無格社

無格社といふのは、社格のない神社で、無格社といふ社格ではありません。

官幣社には、祈年祭と新嘗祭と例祭と本殿遷座祭とに際して、宮内省から幣帛

神饌料（神に捧ぐる物）をお供へあらせられます。

國幣社には、祈年祭と新嘗祭とに際しては、宮内省から、例祭と本殿遷座祭とに際しては、國庫からそれごとく、幣帛神饌料を供へられます。

府縣社、郷社には、府縣より、村社には、市町村より、幣帛神饌料をお供へることが出来るといふことになってゐます。それで、これらの神社中、特に府縣知事より指定されてゐる神社には、祈年祭、新嘗祭、例祭に、それごとく地方團體から幣帛神饌料をお供へします。

神社参拜の作法

神社へ参拜するのは、日本人としてのつとめでありますから、通りがかりの場合でも、できるだけ参拜するやうに心掛けたいと思ひます。それで、次に、個人で神社に参拜する作法について、お話させよう。

私達が普通、神社に参拜するには、多く略式の作法によります。

まづ正面の鳥居をくゞり、コートや襟巻をぬぎ、手を淨めます。又、手を淨めるのと一緒に、口もすゞのが本當ですが、流れでなく、溜り水の場所でしたら、口はすゞがぬ方がよろしい。これは衛生上よくないからです。

手を淨めましたら、身なりを正して神前に立ち、軽く禮をし、玉串なりお賽錢なりを上げます。それから二度拜み、拍手を二つ打ち、また一度拜んで、最後に軽く禮をします。

以上は立つて拜む場合ですが、坐つて拜む場合も同じです。

次に、細かい注意について申し上げます。

まづ手洗ひ場の中へは、絶対にお賽錢を上げぬことです。お賽錢は、神前に捧げるもので、手洗ひ場へあげるものではありません。それから、事情が許すならば、お賽錢は、なるべく投げずに、お賽錢箱の中へそつと落すやうにします。なせかと申しますと、お賽錢は玉串に代へて神様に捧げるものですから、丁寧にあ

げるのが當然であり、又、もし投げて、お賽銭箱の中へ入らず、外へ落ちるやうなことがあるれば、汚れがつくからであります。大祭などで参詣人がこみ合ひ、神前に近く進めないときには、やむを得ず投げますが、このやうな場合には、前の人に當らないやうに注意しなければなりません。

次に、玉串の捧げ方をお話しませう。玉串は、神職が差し出されるのをそのまま、右掌を下に向けて元を持ち、左掌を上に向けて枝の方を支へ、神前に進んで右掌が上になるやうに持ちかへ、元を神前に向けて、静かに置きます。

それから、拍手の打ち方は、正しく両手を合せ、右手を少し引き、つゝしんで二つ打ち、右手をもとに戻して、静かに両手を離します。以上の順序に従つて行ふのは、心から神様を拜む上に、動作の落ちつきを得るためです。

この他の注意としては、神前に下つてゐる鈴です。この鈴は、拍手の代りに鳴らすものですから、拍手を打てば鳴らす必要なく、鈴を鳴らせば、拍手は打たないでよろしい。また稀に見うけることですが、手を洗ふと、いそいで拜殿の前へ

来て、鈴から下つてゐる紐で、その手を拭ふ人があります。こんな無作法は、間違つてもなさらぬやうに御注意下さい。

神社に團體で参拜する作法

團體で神社に一般に参拜する場合には、正式の作法は用ひません。まづ鳥居の前で、指揮者の命令に従ひ、二列から四列位に列を作ります。

それから指揮者を先頭にして鳥居をくゞり、静かに進みます。

手洗ひ場の前で一時とまり、指揮者は一同を代表して手水を使ひます。手を洗ひ、口をすゝぐのが本當ですが、場所によつては流れ水でないところもありますから、口をすゝぐのはやめた方がよいと思ひます。心から全身をきよめるつもりで手を洗へば、その心だけで十分でせう。又、最近では、手洗ひ場に手拭が掛けであるのは、餘り見受けませんが、地方の小さいお社などには、稀に見ることが

あります。共同手拭といふものは、次ぎから次ぎへといろ／＼の人の手に渡るものですから衛生的には非常に危険です。それ故この手拭を使ふことは是非やめて、必ず自分のハンカチか手拭を用ひるやうにしたいと思ひます。

手洗ひが済みましたら、社殿の前に整列します。よく歩きながら先頭から順に頭を下げて、すん／＼通り過ぎてしまふのを見かけますが、あれは、やめていたゞきたいと存じます。整列の形は、神庭の模様によつて縦に列ぶ場合もあり、横列を作る場合もありますから、指揮者は、その場所に應じて指揮します。整列の間隔は、前の人と二歩位あけるのが適當でせう。

列が整ひましたら、指揮者は「氣をつけ」の號令を掛けるのがよろしいと思ひます。神前に臨んで、一段と緊張の氣を高めるわけです。

次で指揮者は「最敬禮」といひます。單に「禮」だけでもよいのですが、最敬禮をするのですから、やはり「最敬禮」といつた方がよいと思ひます。禮のなごさは靜かに約一呼吸で、かうすればよく揃ひ、バラ／＼になるやうなことはあり

ません。

これで禮拜を終へましたが、神前を退く場合も、順序よく列を組んで、もと来た道を引き返すなり、あるひは他の出口へ廻るなりいたします。鳥居をくゞつて外へ出るまでは、緊張を失はず靜肅にしなければなりません。

以上が、極めて一般に行はれてゐる參拜の作法です。

正式に參拜する場合には、次ぎの順序で行ひます。

- 一、手水を使ふ(多く代表者のみ)
- 一、神庭に整列する
- 一、神職が祓ひ詞をとなへる
- 一、神職が祝詞を奏上する
- 一、團體の代表者が祝詞を奏上する
- 一、玉串を捧げる

以上の順序で行ひ、各々細かい作法がありますが、一般には行はれませんから、

説明は略します。

一の宮と總社

昔、國司（地方官）が、新しくその任地に赴きますと、その地方の神社にお詣りしてから政務を執ります。そのとき一番始めにお詣りするのが一ノ宮、二番目が二ノ宮、三番目が三ノ宮と呼びました。しかし國司が、神社全部をお詣りするのは大變ですから、その役所の所在地に近い所にある神社に、その地方の神社の御祭神全部をお祭りし、その神社に参拜すれば、全部の神社に参拜したことになりました。これを總社といひます。今日、總社といふ社名の神社のあるのは、以上の如きわけによるのであります。

神官神職

神主かみぬしとは、神社において、その祭祀に奉仕する職員の總稱で、今日の制度では、神宮（伊勢神宮）の神主のみは、これを神官と稱し、官吏としての本官であり、一般の神社の神主は、これを神職と稱し、官吏待遇であります。

氏子

我々日本人は、どこに住んでいても、その土地に氏神の社があつて、その氏子となつてゐます。一つの或る神社に接する一定の區域を氏子區域といひ、その區域の中に居住する日本臣民をすべて氏子といふのであります。それで、我々が他の土地に移住すれば、その移住したところの神社の氏子となるのであります。

元來、氏神といふのは、自分の氏の神、即ち一族の祖神のことであるとされてゐます。この氏神に對して、産土神（産神）といふのがあつて、この産土神は、自分の生れた土地又は現に住んでゐる土地を守護（鎮守）せらるゝ神であります。つまり、氏神は氏の祖神、産土神は土地の守護神であります。

ところが今日ではこの氏神と産土神とを區別せずして一つにし、すべて氏神といひ、その神社の区域内に住んでゐる者を、すべて氏子と稱してゐるのであります。

祝 詞

祝詞は、神に申し上げる詞であります。古代にあつては、神主が神意を受けて宣べる詞も含まれてゐたのであります。祝詞は古語では「布刀詔戸言」「天津祝詞乃太祝詞事」などといひ、「のりと」は「のりとごと」の略語であり、「のりとごと」は「のりとときごと」の略語であります。つまり「のりとときごと」の

りとごと」は「のりとときごと」の略語であります。つまり「のりとときごと」のりとごと——のりと」となつたのであります。

「のり」は「宣る」から出た語で、本居宣長は「のる」といふのは、必ずしも貴人の言葉でなくても、人に物を言ひ聞かせるのに云ふ語であると説いてゐます。

「とき」は「説く」から出で、「こと」は「ことば」のことでありませぬ。

天照大御神様が、天岩屋戸にお隠れになられしとき、天兒屋根命が祝詞を奏上されました。その祝詞の文句は傳はつてゐませんが、これが祝詞の起源であるといはれます。

かくの如く祝詞は神代に起源を有し、祭りのときには引きつゞいて奏せられて來たのですが、今日までその文句の傳はつてゐるものはすくなく、今日存してゐる古代の祝詞としては、「延喜式」の第八卷に二十七と、臺記の別記に一つとが遺つてゐます。「延喜式」に記されてゐる古代の祝詞は左の通りであります。

祈年祭。毎年二月四日に行はれる祭りの祝詞で、その一年中の穀物の豊作を

祈る祭りでありませす。

春日祭。奈良市の官幣大社春日神社の祭りのときの祝詞です。

廣瀬大忌祭。奈良縣の官幣大社廣瀬神社の祭りのときの祝詞です。豊作物の豊穰を祈願したものです。

龍田風神祭。奈良縣の官幣大社龍田神社の祭りのときの祝詞です。

平野祭。京都府の官幣大社平野神社の祭りのときの祝詞です。

久度古關。久度は奈良縣の久度神社で、古關はその所在がわかりません。

六月月次祭。月次とは毎月のこと。それで毎月の祭りを月次祭といひ、その祭りのときの祝詞です。しかし名は月次祭といつても、實は六ヶ月とりまとめて、六月と十二月とに行はれます。それで六月のを、六月月次祭といひます。その文は祈年祭と殆んど同じです。

大殿祭。宮中の御安泰を祈り奉る祭りのときの祝詞です。

御門祭。宮門の御安泰を祝ひ奉る祭りのときの祝詞です。

六月晦大祓。大祓は六月と十二月との末日に罪穢れを祓ふために行はれます。

す。その大祓のときの祝詞で、十二月のときも同じ祝詞です。

東文忌寸部献三横刀二時呪。この祝詞は漢文で書いてあつて、大祓の行はれる日に、中臣が大祓詞を宣る前に讀む呪文です。

鎮火祭。六月と十二月に、火災を豫防するために、火神を祭るときの祝詞です。

道饗祭。六月と十二月に、衢の神に鬼魅の侵入を防ぐことを祈願する祭りのときの祝詞です。

大嘗祭。昔は大嘗祭と新嘗祭との區別がなく、新嘗祭をも大嘗祭と稱しました。これは年の新穀を神に供へて、その收穫を謝する祭りのときの祝詞です。

鎮御魂齋戸一祭。天皇様の御魂を、神殿に齋ひ鎮めまつる祭りのときの祝詞です。

伊勢大神宮。二月祈年、六月十二月月次祭の祝詞。これより以下九つは、皇大

神宮と豊受大神宮とに用ひられる祝詞です。

豊受宮。同上。

四月神衣祭。伊勢神宮の御料の衣服を奉る祭りのときの祝詞です。

六月月次祭。前の月次祭の祝詞は、勅使の中臣が宣り、それが終つてから祝

詞を、宮司が宣ります。十二月の祝詞も同様です。

九月神嘗祭。新穀を皇大神宮に奉る祭りのときの祝詞です。

豊受宮同祭。豊受大神宮における神嘗祭のときの祝詞です。

同神嘗祭。これも兩大神宮の神嘗祭のときの祝詞ですが、前の二つは、勅

によつて中臣氏が讀み、これは宮司が讀む祝詞です。そしてこれは皇大神宮に申し上げる祝詞ですが、豊受大神宮にも申し上げます。

齋内親王奉入時。齋内親王を大神宮に仕へ奉られたときの祝詞です。齋内

親王はイツキノヒメミコと讀み、齋王又は齋宮とも申し上げ、未婚の内親王であらせられます。

遷ニ奉大神宮祝詞。伊勢神宮は二十年毎に宮殿を御建替あせられます。その

新しい宮殿ができて遷御せらるゝときの祝詞です。豊受宮のもこれと同じ祝詞です。

遷ニ却祟神。祟りをする悪鬼の類を、追ひのけたるために、臨時に行はれる祭りのときの祝詞です。

遣唐使時奉幣。昔、唐即ち支那に使節を遣はされたときの航海の安全を祈られる祭りの祝詞です。

出雲國造神賀詞。國造はクニノミヤツコと讀み、神賀詞はカムヨゴト、又

はカムホギノコトバと讀みます。出雲の國造（今日の府縣知事のやうな役）が新任されたとき、天皇様に奏上する祝賀の詞であります。

以上が延喜式の祝詞で、なほ「臺記別記」に中臣壽詞が記されてゐます。これは天皇様御踐祚の日に、中臣氏が大御代をことほぎ奉るために奏聞する祝詞であります。

右等の祝詞は、古典としてその價值が頗る大なので、神道、神祇等を知る上に、是非とも研究の要があるのですが、現行の神社公祭祀における祝詞は、大正三年に内務省から公布されたものを用ひます。つまりこれが今日の國定祝詞であります。それで國定祝詞としては、古くは延喜式の祝詞と、明治八年に制定された神社祝詞と、現行の神社祝詞との三種があるといへます。

神 樂

神樂は、神を慰めまつるために奏する舞樂であります。またこれを「神遊び」ともいひます。その起源は、天宇受賣命（天鈿女命とも書く）にあります。即ち、天照大御神様が天石屋戸に入り給ひし時、天宇受賣命は面白い歌舞をされて、大御神様の御神慮を和ぎまつり、その結果、天石屋戸よりお出まし遊ばさるゝことゝなつたのであります。こゝにそのときの有様を、少し詳しくお話します。

須佐之男命が御亂暴なされたので、天照大御神様は、天石屋戸にお籠りになりました。それがために世界中はまつくらになつて悪神が横行し、いろゝの妖ひが起りました。かうなつては大變です。そこで八百萬の神（多くの神々）が天安之河原に集り、思兼神といふ智慧のある神の提案によつて、鶏（常世の長鳴鳥）を集めて鳴かしため、鐵敷にするために天安河の河上の堅い石を持つて来て天金山の鐵を取つて、鍛冶師の天津麻羅といふものを尋ね出し、伊弉諾理度賣命に鏡を作らせ、玉祖命に美しい勾玉を澤山貫き通した珠を作らせ、天屋兒命と布刀玉命をお召しになつて、思兼神の獻策のよしあしを占はしめられ、その占ひの結果、思兼神の獻策がよいといふことになつて、天の香山の枝葉の繁つた眞賢木を根こぎにして、その上枝には勾玉をつけ、中枝には八咫鏡をつけ、下枝には白い布（白和幣）や麻布（青和幣）を澤山懸け垂れて、これらの物は布刀玉神が幣帛として持たれ、天兒屋命が祝詞をお讀み申し、天手力男神が石屋戸の御戸の側に隠れてお立ちになりました。

そして天宇受賣命が、天の香山の天の蘿（日影葛）を櫛にし、天の眞折葛（頭を結ぶ眞前の葛）を鬘にして、また天の香山の笹の葉を束ね結び、中が空つぼの容器を臺にして、その上にあがつて、足拍子をとつて鳴らし、つきものがして正氣を失つたやうな格好をして、滑稽な舞ひをされました。そのありさまが、あまりにも面白いので、多くの神々は、どつとお笑ひになりました。

かうして、大御神様が石屋戸からお出ましになる端緒をつくられたのであります。神樂は、また鎮魂（みたましづめ）にも関係があり、その他多く説くべきこともありますが、こゝには略しておきます。

招 魂

靖國神社（別格官幣社）の臨時大祭には、先づ招魂の儀といふことが執り行は

れます。これは臨時大祭が、新しい祭神を鎮めまゐります祭りであるからであります。招魂とは國語では「たまをぎ」といひ、「たま」は魂であり、「をぎ」は「招」であつて、「まねく」ことであります。即ち盡忠の英魂を、招きまゐらすのであつて、靖國神社の臨時大祭は、新しく戦死せられし忠魂英靈を、神として招禱し、鎮祭するために行はれるのであります。

御 羽 車

招魂の儀が行はれるときには、御羽車が用ゐられます。新聞の記事に「四脚臺の上に安置された白木造りの御羽車は、神々しい絹の白とばりをめぐらし、燃えさかる篝火に映えてゐる」など、書いてあります。この御羽車に靈代が奉安されてゐるので、これを碎いていへば、神となられた忠魂英靈が乗つておいでになるのであります。一般の神社では、御遷座のときに、御羽車を用ひられます。遷座

とは神殿の改造または修繕を行はるゝときに、神を假殿へお遷しすることであり、また竣工したときに、假殿から本殿へお遷しすることでありませぬ。

御羽車の起りは、「舊事記」に、大己貴命が、天羽車あまのはぐるまに乗られたといふことが見えてゐます。天羽車といひ、御羽車といひ、その「天」「御」は、ともに美稱であります。要するに車の兩輪を、鳥の兩翼に比して、羽車といつたのであらうといはれてゐます。しかし前にも記した如く、現今の御羽車は、四脚の臺の上に置かれてあつて、車はなくて、輿などのやうに昇るのであります。

注 連 繩

注連繩しめなはは、標繩しめなは、七五三繩しめなはなど、も書きます。神前又は神聖なる區域等にかけて、内外を區劃したるもので、注連繩をかけ渡したる内は清淨なる所であつて、外の不淨と界隔するために用ひらるゝのであります。

注連繩の起源をお話しますと、天照大御神様が、天石屋戸あめのいはやどにお隠れになつたとき、天宇受賣命あめのうづめのみことといふ女神が、神樂をされましたが、その神樂がおもしろいので、集つてゐた八百萬神やほちぢうのかみ（多くの神々）が、どつとお笑ひになりました。その笑ひ聲に、高天原は揺れ動くほどでした。

そこで天照大御神様は、不思議に思ひ召して、石屋戸を細目にかけて、なせ樂しさうに笑つてゐるのかとおたづねになりました。そのとき、天兒屋命あめのこやのみことと布刀玉命ふたたまのみこととが、八咫鏡を差し出して、大御神様に見せ奉りますと、大御神様はいよ／＼不思議に思ひ召して、外の様子を窺ひ給ふために、少しばかり戸からお出ましになりました。そのとき隠れて立つてゐた天手力男命あめのたぢからをのみことが、大御神様のお手をとつて、引き出し奉りました。そして布刀玉命が、注連繩を大御神様の後うしろに張り渡して、

「これより内へはおはいり遊ばされませぬやうに」

と申し上げました。これが注連繩の起りであると傳へられます。この故事に因

んで、神事には、必ず注連繩を用ひるやうになつたのであります。

注連繩は、藁わらで作つたもので、左なひに縋り、間々に藁の端を垂れます。この垂れた藁は、初めが三條、次が五條、次が七條で、また初めにかへつて、三條、五條、七條といふやうに垂れます。それで七五三繩とも書くのであります。しかしこの垂れる藁は、必ずしも七、五、三としなくてもよいのであります。

垂れた藁の間々には、紙垂しでを下げます。その数は、二つ、四つ、八つといふやうに、偶数を用ひます。紙垂は四手、又は垂とも書き、俗に御幣ごへいと稱してゐます。古くは木綿垂ゆわたなども云ひ、主として木綿を用ひましたが、今では紙を用ひます。

注連繩は、右の如きものですが、この他に各種のものがあつてあります。牛蒡注連ごぼうじゆめ、大根注連だいこんじゆめ、板注連いたじゆめ、輪飾りわがき、飾り注連かざりじゆめなどであります。

その張り方は、ゆひ始めの本を向つて右にし、末を向つて左にします。例へば大根注連ならば、太い方がゆひ始めですから、向つて右にし、細い方は末ですから、向つて左にするのであります。但し、出雲大社などでは、この反對に張りま

すが、一般には右のやうに張るのがよろしい。また四面に張る場合には、正面が南に向いてゐるときは、東北の隅から張り始めて、南、西、北を張り、東北の隅で張り終るやうにします。

鳥居

鳥居は神社の門で、即ち神門であります。神門をなせ鳥居といふやうになつたのでせうか。これにはいろいろの説があります。例へば、神門の上に雞が栖んだので、鳥居といふやうになつたのであるとか、諸臣が入る門なので臣入とみいりと云つたのが「とりゐ」といふやうになつたのであるとか、その他各種の説があります。しかしながら、一番穩當なのは、「通り入とほりいり」といふ言葉から起つたとするものでせう。鳥居は神門ですから、神社に參拜する時には、必ずくゞるべきであります。

玉 串

神前に奉奠ほうてん(さゝげ供へる)する玉串たまぐしは、玉籤たまぐしとも玉櫛たまぐしとも書き、また、太玉ふたたま串くしとも八玉串やせたまぐしとも稱します。そしてまた、木綿ゆふ付けたる神、或は單に神ともいふこともあります。太は美稱として冠したものであり、八十は概略の數を現はしたものであつて、やはり美稱の一種であります。

なせ玉串といふかといひますと、大昔は、玉をつけて奉つたからであると賀茂眞淵は説いてゐます。平田篤胤もこの説に同意して「玉串とは、本は眞に玉を貫垂れけんを、やゝ後には、玉を着けずして奉りけんが、後には終に古の手振すたは廢りて、玉串の名のみ存して、木綿きわたを著けたる賢木さかきを然しか稱ふることゝなれるは本義にあらす」といつてゐます。本居宣長は、玉串とは神に手向るものなれば手向たまぐし串くしの意であると説き、その他、玉は靈たまで靈串たまぐしの意であるなど、いふ説もあります。

しかし、今日一般の通説は、玉は美稱であるとされてゐます。串はすべて物を貫くものをいふのであります。今日では、神の小枝に、紙の四垂をつけたものを通例とします。それで、串とは枝の意であります。

賽 錢

賽錢さいせんとは、報賽ほうさい(神の恵みを拜謝してお祭りをする)の料として神に奉つるお錢といふことであります。これを短くいへば、神に奉つるお錢のことです。賽の字は、「神佛にお禮參りをする」といふ意味をもつてゐます。

かくの如く賽錢は、神に奉つるものですから、それを奉つるには謹んで奉つらねばなりません。今日世間では「賽錢を投げる」など、いつて、賽錢箱にむやみに投入する風習がありますが、本當のことをいへば、それは神に對して非禮を行ふものであります。「奉つるもの」ですから、うやゝしく奉納すべきものです。

それを石でも投げるやうに、むやみに投げるのは、まことに恐れ多いことであります。ゆゑに、賽銭箱にいれるときには、しづかに謹んでいなければならないませぬ。たゞ賽銭箱の前に、参拜人が密集してゐて、賽銭を投げなければならぬやうな事情のときには、投げられるのもやむを得ませんが、そのときには、どこまでも「奉つる」といふ敬恭虔誠の心を失つてはなりません。

拍 手

拍手は、神様を拜むときに、必ず行ふ敬禮作法であります。即ち兩手を正しく合せた上、右手を少しくすり下げ、そして静かに左右に開いて拍ち合せるのであります。この拍手を、また平手とも、八開手ともいひ、且つまた世俗で拍手ともいひます。しかし、拍手といふのは誤りで、「手を拍つ」の拍つといふ字を誤つて、拍と書いたので、拍手といふやうになつたのであるといはれてゐます。それ

で齋藤彦磨は、拍手を説明して、

拍手は、うつ物にあらず。神前に備ふる具なり。もと食敷葉といひて、檜・

杉・椎・榎などの葉に供物を盛りて奉るなり。其よしは、古書にあまたあり。後世其食敷葉にかへて、白木の三方、折敷など用ひらるるを、拍手といへり、食敷葉代の義なり。膳字を、加之波天とあるにてもしるべし。

といつてゐます。そして、神拜の時に、手をうつのを、拍手といふのは誤りで、「日本書紀」の持統天皇紀に、手を拍つといふ語があり、「大神宮儀式帳」に、短手二段拍、四段拍、また八開手拍などとあり、その他、「大神宮式」や「中右記」などにも手を拍つともあつて、拍手とは書いてないと説明してゐます。拍手は、もと驚喜する場合などに、自然に至誠の意を表はすより出づる動作であつて、これは日常我れらの経験するところであります。演説などをきいてゐても、大に感動するところでは、聴く者は期せずして一同が拍手します。上代は、天皇様に對し奉りても、拍手を行つたといひますが、今日では、神様を拜むときだけに

限るやうになりました。

初めに、拍手は、八開手ともいふと記しておきましたが、八開手とは、手を八つ拍つこととあります。そして、この八開手を四度、即ち三十二拍つのを、拍手四段（一段が八つ）といひ、古はこれが禮の最なるものとされてゐました。後に四つを拍ち、また後に二つ拍つことになったのであります。即ち今日では、伊勢の神宮を除き、他の神社では、普通二拍手を用ひます。

拍手の仕方は、両手を胸の邊にあげて合せ、少しく上に向けて指をそろへ、右手の指を、左指の第一關節のあたりまですり下げて拍ちます。拍つたら、指をそろへてから解きます。

なほ序ながらお話ししておきます。神式の葬儀のときには、拍手をするのに音を立てぬやうに忍び手で拍手をするのです。バチバチと音を立て、はいけません。

狛 犬

神社に狛犬（高麗犬、胡麻犬）が置かれてゐるのは、どういふわけでせうか。これは、獅子狛犬とも獅子形ともいひ、もと漢韓より傳來したものといはれ、初めは宮殿の門扉、御簾、几帳などの鎮子とされ、兼ねて除魔の意味として用ひられました。後に神社の守護の意味で、社殿の内外に置かれるやうになりました。

鈴

拜殿に鈴が懸けられてゐる神社があります。鈴を神事に用ひるのは、神代からのことであるといはれ、神樂にも神子が鈴を鳴らします。これを神樂鈴といひます。「すゞ」とは、音がすゞしいからすゞといつたので、この鈴を神事に用ひる

のは神慮をすゞしめるからであるといひます。

神 棚

我々は、できることなら、毎日、神社に参拜したいものであります。

けれども、いろいろの事情から、それができない人が澤山あります。それで家の中にある神棚、それを毎朝、必ずをがむやうにしたいものであります。

毎朝、顔を洗ふたら、必ず宮城の方ををがみ、それから家の中に入つて、必ず神棚ををがむやうにませう。朝起きたら、顔を洗ふこと、御飯をたべるのを忘れないのと同じやうに、宮城遙拜と神棚ををがむことを忘れないやうにいたませう。

本當のことをいへば御飯をたべるのを忘れても、宮城遙拜と神棚ををがむことを忘れてはならないのであります。神様ををがむから、御飯もたべられるのだと

思つてゐれば、宮城遙拜と神棚ををがむことを、忘れるやうなことはありません。

神棚は、家の中即ち屋内の神社ともいふべきもので、日本人である限りには、この屋内の神社に、毎朝おまゐりすることを忘れてはなりません。

神棚には、必ず天照大御神様をお祀りすべきであります。つまり、伊勢の皇大神宮のお札をお祀りすべきで、その他、氏神様のお札をお祀りします。また、神道の家では、佛壇がありませんから、一家の祖先の靈を、神棚におまつりします。そして、これらの神々を毎朝をがみます。佛壇のある家では、神棚ををがんでから、佛壇ををがみます。佛壇も必ずをがまねばなりません。けれどもをがむ順序は、神棚を先にします。何事も神様の方を先にします。何事も神様の方を先にすることを忘れてはなりません。

宮城遙拜をし、神棚ををがんで、皇室の彌榮と、皇軍の武運長久をお祈りし、そして自分の心をきれいにする、これほど大切な日課はありません。

神棚の祭り方

神棚を設ける方位については、いろ／＼のことをいひますが、しかしそれは、大して根據のないことが多いのであります。けれども世間でいふことを無視するのもよろしくないのですから、世間一般の通説によるべきでせう。

そこで昔からのいひ傳へによりますと、神棚は乾の隅（乾は戌亥とも書き、北西）に南向きに祭るのが一番よく、東向き、巽（巽は辰巳とも書き、東南）向きもよろしい。また北へ南向きでもよいといはれてゐます。

しかし、都會の借家住ひなどで、方位をやかましくいひますと、祭る場所に困ることもありますから、方位をあまり氣にすることはありますまい。

次に神棚を奉安（設ける）する場所ですが、これも都會の借家住ひなどでやかましくいひますと、その場所に困りますから、つまりは、家の内で清淨なところ

ろ、二階家で、下に祭るなら、上を人の通らぬ所に祭るのがよろしい。もし、二階の眞上を、人が通るやうな事情にある場合は、神棚の眞上に當るところに、簞筒、本箱などをおいて、通ることを避けるやうにします。それも出来ない場合は、神棚の上の天井に、もう一枚天井板をはります。

アパート住ひの一室などでは、本箱や簞筒の上に板を載せ、その上に祭つてもよろしい。棚板には縦の木を用ひることだけは避けます。縦は凶事用の木であります。

注連繩を張るには、ゆひ始めの本を向つて右に、末を左にします。大根注連ならば太い方が、ゆひ始めですから向つて右に、細い方を向つて左にします。

注連繩につける紙、これを御幣といつてゐますが、正しくは「シデ」といひ、四手、垂、紙垂なども書きます。これを注連につけるには、その数は、二つ、四つ、八つなど、いふやうに、偶數を用ひます。

祭 祀

わが國は、祭祀さいし即ち祭りを本とする國であります。なぜ祭祀を本とするか。それは祖先を崇拜し、祖先の遺訓、遺風を尊重するからであります。それで祭祀の中心をなすものは、祖先祭祀即ち祖先のお祭りであります。

祖先を大切に思はざる所に、祭祀はありません。祖先など、どうでもよいなどといふ輕薄な觀念をもつてゐるものに、祭祀などありません。わが國は、祖先を崇拜する國であり、従つて祖先の祭祀を重んずる國であつて、これによつて日本國體の精華が發揮されるのであります。

祭祀の御中心は、天皇様であらせられます。古來わが國民は、天皇様を大祭主と仰ぎまつり、天皇様によりて、敬神崇祖の誠を致し、祭祀を行ふのであります。天皇様は皇祖皇宗の御遺訓によつて、御統治を遊ばされ、ますます皇祖

皇宗の大御心を大御心となし給ひ、その大御心と御合一遊ばし、その大御心を御體得遊ばされ、そして國家國民の平安隆昌を祈らせ給ふために、皇祖皇宗を初め神々をお祭り遊ばさるのであります。國民はこの天皇様の下にあつて、大御心を畏み、大に祭祀を重んじ、寶祚の無窮、皇運の隆昌を感謝祈念せねばなりません。

祭 政 一 致

祭政一致とはどういふことか。祭は祭祀、即ち「まつり」であり、政は政治、即ち「まつりごと」であります。一致とは、「その趣おもむく所を一にする」といふ意であります。

それで、祭政一致とは、天皇様が、皇祖（皇祖皇宗）の大御心を御尊重遊ばされて、その大御心と御合一遊ばし、その大御心を御體得遊ばさるゝのが祭であ

り、皇祖の大御心を御尊重遊ばされて、皇祖の大御心、御遺訓を御發揚遊ばさるるのが御政であります。かくの如く強いて申し上げれば、皇祖の大御心、御遺訓の御體得が祭であり、その御發揚が政であつて、つまるところは、皇祖の大御心、御遺訓の御尊重といふことであつて、祭政は一致すると、かう見奉るべきであります。

祭 祀 令

祭祀さいし（まつり）は、敬神の誠を現はす儀禮であつて、神代の大昔から、國家至重の公事とされてゐます。畏くも、天皇様は、祭祀を第一と遊ばされ、國家祭祀の執行者にましますのであります。されば昔より國民は、天皇様を大祭主と仰ぎ奉り、天皇様に依りて敬神の誠を致し、祭祀を行ふのであります。

かくて祭祀の制度は、古來からありますが、明治以來、殊に整備せられ、祭祀

令なるものが發布せられ、祭祀は、この祭祀令によつて、嚴に行はれるのであります。祭祀令には三つありまして、皇室祭祀令（明治四十一年九月十九日皇室令第一號）、神宮祭祀令（大正三年一月二十六日勅令第九號）官國幣社以下神社祭祀令（大正三年一月二十六日勅令第十號）がそれでありま。

皇室祭祀令は、天皇様が行はせらるゝ祭祀を御規定遊ばされしもので、二十六條より成つてゐます。これによりますと、皇室の祭祀には、大祭と小祭とがあつて、大祭には、天皇様が、皇族及び官僚を率ゐて、親しく祭典を行はせられます。その大祭は、

元始祭、紀元節祭、春季皇靈祭、春季神殿祭、神武天皇祭、秋季皇靈祭、秋季神殿祭、神嘗祭、先帝祭（毎年の崩御日）、先帝以前三代の式年祭、先后の式年祭、皇妣たる皇后の式年祭。

等であります。式年は崩御の日より三年、五年、十年、二十年、三十年、四十年、五十年、百年。百年以後は毎百年とされてゐます。小祭は、

歳旦祭、祈年祭、明治節祭、賢所御神樂、天長節祭、先帝以前三代の例祭、先
後の例祭、皇妣たる皇后の例祭、綏靖天皇以下先帝以前四代に至る歴代天皇
の式年祭。

等であります。皇室の御祭祀に中祭はありません。

神宮祭祀令は、申すまでもなく、伊勢神宮の祭祀令で、七條より成つてゐま
す。その大祭は、

祈年祭、神御衣祭、月次祭、神嘗祭、新嘗祭、遷宮祭、臨時奉幣祭。

等であり、中祭は、

日別朝夕大御饗祭、歳旦祭、元始祭、紀元節祭、風日祈祭、天長節祭、明治節
祭。

等であり、小祭は、「大祭及び中祭以外の祭祀は之を小祭とす」と定められてゐ
ます。

次に、官國幣社以下神社祭祀令即ち伊勢神宮以外の一般神社の祭祀令は、九

條より成り、その大祭は、

祈年祭、新嘗祭、例祭、遷座祭、臨時奉幣祭。

等であり、中祭は、

歳旦祭、元始祭、紀元節祭、天長節祭、明治節祭、神社に特別の由緒ある祭
祀。

等であつて、小祭は、神宮祭祀令と同じく「大祭及び中祭以外の祭祀は之を小祭
とす」と規定されてゐます。こゝに注意すべきは、別格官幣社靖國神社の合祀祭
は、これを大祭とすと定められてゐます。

祈年祭

祈年祭は、「としごひのまつり」と讀む。二月十七日に行はれる祭祀(まつり)
であります。すべての祭祀が皇室中心をもつて行はれる如く、祈年祭も皇室中心

をもつて行はれ、「皇室祭祀令」によれば、この祭りは、宮中小祭であり、伊勢神宮を初め各神社では大祭であります。伊勢神宮より發行せられたる曆を見ますと、二月四日の項に「祈年祭班幣」と記され、二月十七日の項に「祈年祭奉幣」と記されてあつて、伊勢神宮恒例の大祭は、この二月十七日の祈年祭を以て始まるのであります。

「としごひのまつり」の「とし」とは、稻を初めとして穀物のことであり、「ごひ」は「こひ」で、請ひ禱るといふ意であります。即ち祈年祭は、風雨霖旱の災ひなくして五穀の豊饒ならんことを祈り給ひ、且つ國力の充實を祈らせ給へる天皇様の大御心を、皇祖天照大御神様及び豊受大神様の大前に申し述べらるゝ御祭儀であります。この日、天皇様には、賢所、皇靈殿、神殿に出御、掌典長の奉仕で御祭典を行はせられ、御親拜あらせられます。そして當日は伊勢神宮を始め奉り、全國の官國幣社に奉幣せしめられるのであります。伊勢神宮では二月十七日の午前に豊受大神宮（外宮）午後皇大神宮（内宮）の祭儀を行はれるのであり

ます。この奉幣に先ち、二月四日に班幣あつて、この日、大御饌供進の儀が行はれます。班幣とは、幣帛を豫め班つことであり、奉幣とは、勅令によつて幣帛を奉献することであります。

さて延喜式祝詞の中に、この祈年祭の祝詞があります。この祈年祭の祝詞の中に、特に天照大御神様に申し上げる一節があつて、日本族の積極進取の大精神か、一言一句の上にも活躍せる壯快なる大文章であります。

辭別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見霽かし坐す四方の國は、天の壁立つ極、國の退立つ限、青雲の靄く極、白雲の墜坐向伏す限、青海原は棹花干さず、舟の艫の至り留まる極、大海原に舟満ち都都氣て、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根履み佐久禰て、馬の爪の至り留まる限、長道間無く立て都都氣て狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、残をば平らけく聞き看さむ。又皇御孫命の御

世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉るが故に、
皇吾が陸神漏伎神漏彌命と宇事物頭根衝き抜きて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱
辭竟へ奉らくと宣る。

と。以上の通りでありまして、實に雄大なる思想を吐露したる名文であります。
いはゆる日本の生々主義、積極主義、進取主義は、この祝詞に現はれてゐます。

大 祓

毎年、六月三十日と十二月三十一日との二度、皇室におかせられては、わが日本臣民が犯したいろいろの罪穢れを、祓ひ清めさせ給ひます。これは古來の御儀であつて、これを大祓といひます。この皇室の思召を承けて、伊勢神宮を初めとし、全國の各神社においても、大祓が執り行はれます。即ちわれ／＼の家庭へは、氏神の社から祓麻や形代が配られます。この形代は、また人形とか、贖兒

とか、撫物とかとも稱します。普通には、紙を人形に切つたもので、これは大祓のときのみ用ひるものと限られてゐませんでした。現今では大祓のときに専ら用ひるものとなつてゐます。それで、この形代が、氏神の社から、私たちの家に配られますと、この形代で私たちの身體を撫でます。それは私たちの心身についたいろ／＼の災害邪惡を祓ひ除けるため、つまり、形代に撫で移すといふ意味なのであります。

要するに大祓は、日本の道たる神道の上から見て、國家的に最も重要な儀式なのであります。皇室を御中心として、國民擧つて、各神社において、同時に行はれるのであります。即ち畏くも、天皇陛下には、御祓所におかせられて、大祓の御式を行はせられます。それは、我れ／＼臣民の罪穢れを祓ひ除き、我れ／＼臣民が、心を清く美しくして、公明正大なる臣民として、生々と働くやうにといふまことに有り難い畏い大御心から、大祓の御式を行はせらるるのであつて、神社では、この有り難い大御心を奉體して、大祓のお祭りを行ふのであります。か

くして我れ／＼日本臣民は、小は、自分一個人の心身の罪穢れを祓ひおとして、日本臣民として善美なる人間、清淨潔白なる人間となつて、公明正大なる生活活動をなし、大は、國家及び世界を善美化して皇道を宣揚するのであります。

元來日本人は、清淨といふことを、非常に尊びます。罪穢れに染まつた精神を、黒心(きたなきこころ)と稱し、清淨なる心を、明き心即ち清明心と稱して、この上もなき眞心として尊びます。それで神代の昔から、禊祓といふことが、特に大切なこととして行はれたのであります。禊は滌身で、身體を水をもつて清め、祓は洗ひで、身體を洗ひ清めるといふ意であります。それで、禊も祓も、同じことであつて、たゞ禊は水をもつて清め、祓は幣又は櫛をもつて清めます。この禊祓を、皇室を御中心として、みんな揃つて同時に(六月と十二月)行ふのが大祓であります。大祓は、日本中一つになつて、汚穢を拂ひ清めるのであります。

禊の起源は、伊邪那岐神にあり、祓の起源は須佐之男神にあります。そして大

祓はいつ頃から行はれるやうになつたかといひますと、それは、はつきりしたことはわかりませんが、かなり古い時代から行はれたやうであつて、これが一定の制度として整つたのは第四十代天武天皇様の御代であらうといはれてゐます。

禊祓の起源

禊と祓は、いつから起つたか。それは、伊邪那岐神より初まつたのであります。

即ち、伊邪那美神がおかぐれになつて、黄泉國(死の國)へゆかれました。そこで岐神は非常にお嘆きになつて、美神の後を追ふて、黄泉國へお出かけになりました。ところが、黄泉國で穢い光景を御覽になりました。それで岐神は「實に穢いものを見た、その穢を祓ふために、禊をしよう」と仰せられて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にゆかれてお身の穢れを洗ひ清め、拂ひすてられまし

た。

これが禊祓の起源で、自ら、即ち自動的に行はれた禊祓であります。またその後、次ぎのやうなお話があります。

それは、天照大御神様の御弟神の須佐之男命すさのわかみことが、非常に御亂暴をなされた、そのために、大御神様は、天石屋戸にお隠れになりました。世界は眞暗になつて大變な事になりましたが、漸くのこと、天石屋戸からお出ましを願ひ、須佐之男命を、根之國ねのくに（邊鄙な地方）に追放されました。そのときに、八百萬神やほむろのかみ（多くの神）は、協議された結果、須佐之男命の罪惡を拂ひ清めるために祓をして、清らかな神として、追放されたのであります。

この須佐之男命の祓は、他動的のものゝ初まりです。他人から祓つて貰つたのであります。

四 方 拜

元日の朝早く、天皇陛下には、宮中の神嘉殿の南庭に出御遊ばされ、伊勢神宮を始め奉り、天神地祇、四方の諸神社や御陵を拜し給ひ、この年中に災害が起らぬやうに、そして、皇運の御隆榮を祈らせ給ふのであります。これを四方拜と申し上げます。

右の御次第を、すこし詳しくお話しますと、大體、元日の午前四時に、神嘉殿の南庭に、屋が設けられます。その屋の中央には簀薦が敷かれ、そこに御屏風二雙を立廻し、中に、御座が設けられ、燈臺二つを供へられます。

かくて、天皇陛下には、五時に、こゝに出御遊ばされ、先づ伊勢神宮（内宮の天照大御神様と外宮の豊受大神様）を拜され、次ぎに多くの神々を拜され、また神武天皇様の御陵、先帝様の御陵、次ぎに四方の神社、御陵等を拜し給ひ、

そして、皇位の無窮に彌榮を給ふこと、五穀の豊作であること、國民が幸福で安らかであることなどを御祈り遊ばされるのであります。

この四方拜の御拜がおすみ遊ばされてから、直ちに歳旦祭を行はせられます。歳旦祭と申すのは、賢所、皇靈殿、神殿の御順序で、御拜遊ばされる御儀式であります。

この賢所、皇靈殿、神殿を、宮中三殿と申し上げます。賢所には、天照大御神様をお祭りになり、皇靈殿には、御歴代の天皇様や皇后様、それに皇族様方をお祭りになり、神殿には、あらゆる神々をお祭になつてゐられます。

この宮中三殿の御近くに、前にお話した神嘉殿が建てられてあるのです。新嘉殿は、新嘗祭の御祭りを遊ばされる所で、そして、前記のやうに、四方拜は、この神嘉殿の南庭で行はせられるのであります。

元 始 祭

一月三日には、元始祭と申して建國の根本を彌榮をせしめらるゝ御祭りを行はせられます。

即ち、國の成立したる元始を、いよ／＼發揚せらるゝ御祭りであります、言葉をかへていへば報本反始（本に報い、始めに反ること）の義に基いて、年の始めに諸神を御祭り遊ばされるのであります。

この日、午前十時より、宮中における賢所の御前にて行はせらるのであります。同時に日本中のあらゆる神社に於ても、お祭りが行はれます。それで地方官員拜禮式に、左の通り定めさせられます。

此日宮中ニ於テ、賢所、天神地祇、御歴代ノ皇靈ヲ、御親祭アラセラル、是天津日嗣ノ本始ヲ祝シテ、歳首ニ祈リ給フ義ナルヲ以テ、元始祭ト稱ス、因テ官

員ニ於テモ、最寄神社へ參拜スベシ。

元始祭とは、實にかくの如き御祭りですから、我等臣民も、必ず神社に參拜すべきであります。

紀元節と建國祭

紀元節は、申すまでもなく二月十一日で、即ち、第一代の天皇様であらせらるる神武天皇様が、御即位遊ばされた日であります。

これを、すこしく詳しく詳しくお話すれば、今年（昭和十八年）から二千六百三年前の、舊曆の辛酉かのとせうの正月元日（この日を太陽曆にすると二月十一日）に、神武天皇様は、大和の橿原宮かしはらのみやに、第一代の天皇様として、御即位あそばされたのであります。

神武天皇様は、御名を神日本磐余彦尊かむやまといはむひこのみことと申し上げ、天照大御神様から御五代目

の鷓鴣草うがやふきあへ尊へのみこと様の第四の皇子様にましまし、御幼名を狹野尊さなのみことと申し上げました。

御四十五歳の御時に、日本國をよく御統治遊ばされるために、日向の高千穂の宮を出でさせ給ひ、東へ向はせられ、天皇様の大きく高く尊き御聖徳によつて、心のよくない者共をも心をよくさせられ、どうしても服従せぬ者だけを御懲らしめになり、御平げ遊ばされ、大和國畝傍山の東南にあたる橿原に、皇居を御建てになつて、御即位遊ばされたのであります。その御在位は七十六年であります。御歳百二十七で崩御遊ばされました。四月三日の神武天皇祭は、實に崩御の日に當るのであります。御陵は、畝傍山東北陵と申し上げます。

この神武天皇様の御即位の年をもつて、紀元とすることは、明治五年十一月十五日に定められ、翌年三月七日に、紀元節と稱せらるることが定められました。

いつたい、紀元とは、どういふ意味の語かといひますと、紀元の、紀は歳とい

ふ意味であり、元とは始めといふ意味であります。それで紀元とは、わが國の年代を數へる最初の第一年といふ意味であります。また、紀元は、皇國の紀元でありますから、皇紀とも申します。

右のやうに、わが國の紀元は、神武天皇様の御即位の年をもつて、第一年としますが、しかし、わが國が、このとき初めてできたといふのではありません。わが國は皇室を本として、遠い神代の時代から、即ち年數も分らぬ太古から、生まれ出でた國であります。それで年を計算するのにあまり大昔で、あまり長くて、かぞへるのに困りますから、年をかぞへることのできる神武天皇様の御時代を紀元元年としてかぞへることになつてゐるのであります。

以上お話したのでお分りの如く、神武天皇様のときに、始めて日本といふ國が建てられたではありません。しかし、神武天皇様の御事業は、まことに御偉大で、それまでは、ささやかであつた日本國が、神武天皇様の御稜威によつて、立派なる日本國の基が固められたのであります。ゆゑに、かういふ點からい

へば、神武天皇様の御事業をもつて、日本肇國の御大業と申し上げてよろしいのであります。けれども、もつと適當な言葉でいへば、神武天皇様の御事業は、日本國大振興の御事業であつたと申し上げべきでせう。

つまり神武天皇様は、皇祖であらせらるゝ、天照大御神様の御精神を受けつぎ遊ばされて、その御精神に依られて、日本國大振興の御大業を遊ばされたのであります。

この紀元節の日に、建國祭が行はれます。この建國祭は、大正十五年の紀元節の日から行はれるやうになり、年中行事の一つとなつてゐます。

初め、この建國祭を行ふことを唱へられましたのは永田秀次郎氏等でありまして、これら有力な方々の力によつて、年中行事として毎年行はれるやうになつたのであります。

前にもお話したやうに、紀元節の日が、わが國の肇國の日ではありせん。又た、紀元節は、皇室における御大祭であり、國家としての大祝節であつて、まことに

重大な皇國の祝祭日であります。ところが、建國祭の方は、さういふ意味のものではなく、國民の習慣として、行事として行ふものなのであります。

ゆゑに、紀元節と建國祭とは、別々のものなのであります。紀元節のことを建國祭といふのではなくて、紀元節の日に建國祭を行ふのであります。

では、なせ紀元節の日に、建國祭を行ふかといふと、他の祝祭日の日より、この紀元節の日が、建國祭を行ふのに、一番適當であるとされたからです。前にもお話ししたやうに、紀元節の日は、建國即ち日本國のできた日ではありません。けれども 神武天皇様が、日本國の基を御固めになつて、御即位遊ばされた誠に有り難く、尊く、お目出度い日であつて、一面からいへば、肇國の御大業を御完成遊ばされた日ともいへますから、この日に、建國祭を行ふて、更に遠く神代の昔を思ひ、建國の大精神を反省して、日本國民としての自覺を深めるために、建國祭といふものが行はれるのであります。

つまり、紀元節には、神武天皇様の御偉業を回顧し、奉祝します。かうして

古い昔のこと、即ち第一代の天皇様の御事を回顧し、奉祝するのでありますから、この日に、建國祭を行ふて、更に古い神代のこと、即ち肇國の大昔のことを、併せて回顧し、奉祝して日本國民の大精神を發揚しようといふのであります。

右の如く、紀元節は、國家で定められた祝祭日であり、建國祭は、國家で定められたものではなく、愛國の至誠に燃ゆる有志の人々によつて行はれるやうになつたもので、いはゞ一つの愛國運動であります。ゆゑに、紀元節は紀元節であり、建國祭は建國祭であります。紀元節のことを、建國祭などといふではありません。このことは、よく心得ておかねばなりません。

神武天皇祭

四月三日は神武天皇祭であります。申すまでもなくこの日は、神武天皇様の

崩御あらせられた日であつて、皇靈殿において御親祭を行はせ給ひます。

「日本書紀」によりますと、天皇様の七十六年三月十一日に、橿原宮に崩御あらせられ、御壽百二十七にましまし、「古事記」によれば、御壽百三十七にまします。三月十一日は、太陽曆にしますと四月三日に當りますので、この日を祭日と定めさせ給ひ、御親祭を行はせらるゝと共に、豫め勅使を畝傍山うねがし東北陵のきたけのみささぎ（奈良縣高市郡白檀村大字山本）に遣はされて、當日幣帛を奉らしめ給ひ、且つ神饌を供へて御陵祭を行はしめられます。

天 長 節

天長節とは、申すまでもなく 天皇陛下の御降誕遊ばされた日のことでありま
す。即ちこの日は 天皇陛下の御降誕を祝賀し奉り、そして聖壽の萬歳を祈願し
奉る祝日であります。

この日の御儀式は、宮中三殿のお祭りから始まります。

即ち 天皇陛下には、賢所、皇靈殿、神殿といふ御順序で御拜遊ばされます。
それから、大元帥の御正装にて、觀兵式に行幸あらせられ、還幸の後、宮中鳳凰
の間にて、皇族様方を始め、高位高官の方々の拜賀をお受け遊ばされます。その
後で、豊明殿において、皇族様方を初め、高位高官の方々や、外國の大公使を召
されて、御宴會を御開き遊ばされます。

天長節の、天長といふ語は、支那の「老子」といふ本に

天長地久

といふ語が書いてあります。これから出たものであるといはれてゐます。この天
長地久の中で、天長に、節をつけて、天長節と稱して 天皇陛下の御降誕の日の
ことを申し上げ、地久にも、やはり節をつけて、地久節と稱し、皇后陛下の御降
誕の日を申し上げるやうになつたのであります。

つまり、これは、天地と共に、長く、久しく 天皇陛下と皇后陛下の御歳が、

限りなくあらせらるゝことを祝ひ奉る意味なのであります。

天長節を御始め遊ばされたのは、第四十九代 光仁天皇様の御時であります。しかし、學者の説によりますと、その後は、あまり天長節といふ名稱が用ゐられてゐなかつたとのことです。ところが、明治元年に、天長節を行はせらるゝといふ政府の達しが發表せられ、明治三年から、天長節の御祝ひが行はれ、儀禮が整つて行はれたのは、明治五年からであります。

春秋の皇靈祭

春には、春季皇靈祭があり、秋には、秋季皇靈祭があります。春季皇靈祭は、三月の春分日に行はれ、秋季皇靈祭は、九月の秋分日に行はれます。春分日は春の彼岸の中日のことであり、秋分日は秋の彼岸の中日のことであります。

この春秋二季の皇靈祭とは、どういふお祭りであるか。そのあらましをお話し

ますと、宮中には三つの神殿が設けられてあります。賢所、皇靈殿、神殿の三つで、これを宮中三殿と申し上げてゐます。賢所には 天照大御神様を、皇靈殿には御歴代の天皇様を初め、皇后、皇族方を、神殿には多くのあらゆる神をお祭り遊ばされてゐます。

それで、春秋二季の皇靈祭は、この皇靈殿において、天皇陛下がお祭りを遊ばされるのであります。そしてこの日には、神殿祭をも遊ばされます。ゆゑに、宮中（皇室）のお祭りには、春秋二季の皇靈祭と共に、春秋二季の神殿祭が行はれるのであります。共に、宮中におかせられては大祭日とされてゐるのであります。

皇靈とは、御歴代の 天皇様の御神靈といふ意味であります。また、廣く解すれば、御歴代の 天皇様を初め、皇后、皇族方の御神靈といふ意味であります。その御神靈をお祭り遊ばされてゐる所ですから皇靈殿と稱せられ、そして、そのお祭りを行はせらるゝから、皇靈祭と稱せらるゝのであります。

かく、皇靈をお祭り遊ばされるのは、つまり、皇室の御祖先様をお祭り遊ばされることでもあります。わが國は祖先崇拜といふことを本とせる國であります。私達の家でも、家の祖先を祭ります。これは祖先崇拜であります。

ところで、皇室は、もと／＼私達國民の大元の御本家であらせられますから、皇室の御祖先は、やがて、私達國民の御祖先に當らせらるのであります。それゆゑに、わが國では、君民一家と申します。かゝることは他の國にはありません。まことにかたじけなく、有難いことでもあります。それで、宮中において、皇靈祭を行はせらるゝことは、つまり、國家全體、國民全體の祖先のお祭りといふことになります。されば、この日は、國家の祭日として、一般に休日とされてゐるのではありません。

神嘗祭

神嘗祭は、音讀してシンシャウサイといひ、俗にはカンナメサイと呼び、昔はカンナメマツリ、又はカンニヘノマツリなど、稱し、十月十七日に新穀を以て作れる神酒と神饌とを、伊勢神宮に供へ奉る御祭であります。この日、天皇様におかせられては、賢所において御親祭を行はせられ、伊勢神宮へは勅使を參向せしめられて、御鄭重なお祭が行はれます。

新嘗祭

毎年十一月二十三日の新嘗祭は、ニヒナメマツリ、ニヒナヘマツリ、ニハナイマツリなどといひ、また漢字の通りシンジャウサイともいひます。十月十七日の

神嘗祭と共に最も重大なる祭りの一で、共に宮中大祭であり、共に國定の祭日であります。神嘗祭も新嘗祭も、新穀に關する祭りであり、神嘗祭は、先づ第一に新穀を、皇大神宮竝に賢所かしこころ（いづれも 天照大御神様を祭らる）に奉らせ給ひ、天照大御神様の神恩を感謝遊ばさるゝ御祭典であります。新嘗祭は、天皇陛下が新穀を召上られる御祭典で、この日、神嘉殿に、天照大御神様を始めとし奉り、諸神を招請遊ばされて御親祭あり、引續き御同殿にて、天皇陛下親ら新穀を召上るのであります。神嘉殿と申し上げるは、平常は空殿であつて、新嘗祭のときだけ、この神嘉殿に神々をお祭り遊ばさるゝのであります。

天皇陛下が御即位禮を行はせられた後、新穀を聞召さるゝのを大嘗祭だいじやうさいと申し上げますが、大嘗祭は御即位禮の御時にのみ行はせらるゝ御祭儀で、この大嘗祭の眞義を、年々行はせらるゝのが、この新嘗祭であります。

新嘗祭は、天照大御神様がこれを行はせられたのに起源します。「日本書紀」の神代卷に「天照大神新嘗きこしめす時」と記されてあります。殊に稻（米）は、

天照大御神様より御授け下されたるもので、同じく「日本書紀」の神代卷の一書に、天照大御神様の神勅として、

吾あが高天原たかまはらに所御すきこしめ齋庭いにはの穂いねほを以て、亦吾またあが兒みこに御せまかまつるべし。
と謹記されてあります。

所御はキシメスで、即ち聞召す、お食あがりになることであり、齋庭いにはとは、淨められたる庭即ち清らかなる場所のことであり、穂は、イナホ稻穂であつて、即ちお米であります。吾あが兒みことは、皇孫の御事で、つまりは、御代々の 天皇様の御事であります。かくの如く、天照大御神様は、稻を、天皇様にお授け遊ばされ、以て日本人の食物として下されたのであります。されば、日本人にとつて、主食物たる米は、最も有り難く、最も尊く、しかも最も懐かしい物なのであつて、一粒といへども、おろそかには出來ず、これを食するにあつては、天照大御神様（即ち天皇様）の御神恩に感謝し奉らねばなりません。

明治節

十一月三日は明治節であつて、明治天皇様の御降誕遊ばされし日であり、明治の御代における天長節でありました。この明治節は、昭和二年三月三日の御詔によつて御定め遊ばされしもので、長くも、天皇陛下におかせられては、われ等臣民と共に、永く明治天皇様の御遺徳を仰がれ、明治の昭代を御追憶遊ばされるために、御定めあらせられたのであります。

主祭神と配祀神

神社の御祭神には、主祭神しゅさいしん（主神）の他に、配祀神はいししんとか、相殿神あひどののかみとか、従祀神じゆししんとかと稱するのがまします。主祭神は、その神社が創建せられたときから、

その神社の主體として祭られてゐる神であつて、いひかへれば、その神を祭るために、その神社が創建せられたのであります。それで主祭神は、殊更に主祭神といはず、普通一般には單に祭神と稱してゐます。この主祭神を祭る社殿を、本殿とか正殿とかといひます。

主祭神に附隨して祭る神を、配祀神とか、合祀神とか、相殿神（合殿神・會殿神）とか、従祀神とかと稱します。この配祀神には、その神社の創建せられたときから、主祭神に何かの縁故關係がある神なので祭つたのがあり、また縁故關係があるので、後に祭つたのがあり、そしてまた主祭神と縁故關係はないけれども、後になつて、何かの事情で祭つたのもあります。

主祭神と配祀神とに尊卑の別はありません。主祭神が必ず尊い神であり、配祀神は主祭神の下につく神であるなど、いふ意はすこしもないのであります。それで、甲の神社においては主祭の神であらせらるゝ神が、乙の神社では配祀の神であらせらるゝこともあり、丙の神社では配祀の神であらせらるゝ神が、丁の神社

では主祭の神でゐらせらるゝこともありませぬ。

例へば、神戸市の縣社七宮神社の主祭神は、大己貴命であらせられ、配祀神は
大日靈貴尊様と天兒屋根命とであらせられます。大己貴命は即ち大國主神であ
らせられ、大日靈貴尊様は即ち天照大御神様にましまし、大御神様は皇大神宮の
御祭神で、絶對至尊の神にまします。しかしこの神社においては配祀の神として
お祭り申し上げてゐるのであります。

要するに、主祭神と配祀神との別には、尊卑といふことはなく、たゞその神社
の由來と歴史等の事情によるのであります。

なほ配祀神が後に主祭神とされることもありませぬ。例へば敦賀市の官幣大社氣
比神宮の主祭神は伊奢沙別命、仲哀天皇様、神功皇后、日本武尊、應神天皇様、
玉妃命、武内宿禰の七座にまします。この中で伊奢沙別命が本來の主祭神に
ましまし、他の六座は、後に主祭神とせられたる神々であらせられます。序にお
話しておきます、伊奢沙別命とは、第七代孝靈天皇様の第三皇子吉備津彦命で、

亦の御名を五十狹芹彦命と申し上げる御方の御事であるとも、また神功皇后の
外家の祖たる天日槍命の御事で、命がお持ちになつた八種の寶物の中に、膽狹
沙太刀といふのがあつて、この太刀の名稱から、命を伊奢沙別命とも申し上げる
のであるともいひ、その他諸説があります。

氏 神

氏神とは、氏の共同祖先をいふのであります。氏とは、同じ血筋から分れた多
くの家族の一團をいひます。例へば、源、平、藤原、橘など、いふのがそれ
です。

それで、たとへば、藤原といふ氏の一番遠い、大本の祖充は、天兒屋根命とい
ふ方です。ゆゑに、藤原氏の氏神は、この天兒屋根命であります。この命の子孫
か、中臣といふ姓氏を、天皇様から賜ひました。それを、鎌足公のときに、藤原

と改めました。この藤原氏の一族がふえて、藤原といふ姓氏のみでは、混雑して、誰が誰だかわからぬやうになりましたので、藤原氏の中に、北家、南家、白河、近衛、九條など、いふ、いろ／＼の稱號をつけました。その稱號が、今日では姓になつてしまひました。

右は藤原氏の例ですが、さういふ風に、すべて私たちの遠い／＼祖先をたづねますと、藤原氏とか、源氏とか、平氏とか、橘氏とか、さういふ元の氏に達します。その大本の氏の祖先を、氏神としてお祭りし、敬ふのであります。

それで、私達の家の氏神を知るには自分の家が、どの氏から分れて出たかその系圖をしらべると分るのであります。

但、氏神は、その氏から分れ出た家だけが、崇拜すればよいのだなど、考へたならば、それは大なる間違ひです。氏神は、その氏の祖神であるとともに、また國民すべての祖神なのです。たとへば、近いところでは、乃木大將は乃木家だけの祖先であり神であり、東郷元帥は、東郷家だけの祖先であり神ですが、わ

が皇國に大功のあつた方ですから、同時に、國民全體の祖先神として、國民のすべてが崇敬するのであります。

産 土 神

産土神うぶすながみ（うぶ神様）とは、私達の生れた土地、又は私達が現在住んでゐる土地を、お守り下すつてゐる神のことです。

ところが、今では、産土神のことを、俗に氏神と云つてゐます。なせ、さういふやうになつたかといひますと、私達の家は、どの氏から分れ出たのか、系圖をよく調べない人が多いので、どの神が氏神だか、わからなくなつてゐます。

それに私達は、今日では、生活の關係上、他郷へどし／＼移住します。ゆゑに私達は、血筋や家柄に關係のある氏神のお祭りしてある土地に住むことがすくな

く、産土神即ちその土地の住民の保護神をお祭りせる神社の下に住むことが多くなつてゐます。それで産土神を氏神と呼んでしまつてゐるのです。

ゆゑに、正式には、氏神と産土神とは違ひますが、しかし、いづれも

の尊い神なので、私達は、その住んでゐる土地にある神社に、機會あるたびに参拜をし、崇敬の誠を致さねばなりません。

鎮守神

ちんじゆのかみ

鎮守神といふのは、その土地またはその場所を安らかに守護し給ふ神のことであります。この神に似たのが産土神うぶすなのかみで、これは或人の出生した土地を守護し給ふ神です。しかしいづれも土地を守護し給ふ神なので、後には鎮守神をも産土神といふやうになりました。そしてまた氏神もあつて、これは氏の祖先神といふ意味ですが、今日では、鎮守神も産土神もすべてを氏神と稱してゐます。

昔、寺院などでは、その莊園（税を納めない私有地）の安穩を祈願するために、鎮守社を建てました。例へば比叡山延暦寺は、日吉神社を鎮守神とし、東大寺は八幡宮を鎮守神としました。また一國の鎮守神といふのもあつて、これはその國内の著名な神を稱しました。例へば出羽國では大物忌神社おほものいみ（現在國幣中社）を鎮守神とし、これを鎮守大物忌明神おほものいみみやうじんと稱しました。また王城鎮守神と稱したのもあつて、これは帝都を守護せらるる神で、伊勢神宮以下二十一社をこれに充てました。その他、邸宅を守護する鎮守神、氏を守護する鎮守神などもありました。

八幡様

八幡様とは、いかなる神にましますか。これには
應神天皇様のみを八幡神と申し上げる場合と、

應神天皇様と神功皇后とを八幡神と申し上げる場合と、

應神天皇様と仲哀天皇様と神功皇后とを八幡神と申し上げる場合と

この三つがあります。また右の他に、比咩神と玉依姫命とをお祭りしたのもあります。

しかし、大體において、八幡神と申し上げれば、應神天皇様のことであると心得てゐてよろしいのであります。

京都府の官幣大社石清水八幡宮には、應神天皇様と比咩神とがお祭りしてあります。比咩神は、姫神であつて、こゝでは宗像三女神のことです。即ち多紀理毘賣命、市寸鳥姫命、多岐津毘賣命の三女神であらせられます。

大分縣の官幣大社宇佐神宮にも、石清水八幡宮と同じにお祭りしてあります。

福岡縣の官幣大社宮崎宮には、應神天皇様を主祭神とし、配祀神として神功皇后と玉依姫命とがお祭りしてあります。玉依姫命は、鷓鴣草葺不合尊様の皇后にましまし、神武天皇様の御母神にまします。

鎌倉市の國幣中社鶴岡八幡宮には、應神天皇様、仲哀天皇様、神功皇后の三神

がお祭りしてあります。

函館市の國幣中社函館八幡宮には應神天皇様がお祭りしてあります。但、この神社には相殿神として住吉神と金刀比羅神とがお祭りしてあります。

熊本市の國幣小社藤崎八幡宮（この神社のみは、幡の字を用ひず、庵を用ふ）には應神天皇様がお祭りしてあります。但、相殿神として住吉神と神功皇后とがお祭りしてあります。

さて八幡神（ヤハタノカミ）といふ御神名は、何に因むか。これには昔からいろいろの説があつて、天より八つの幡が降つて來たから、さういふのであるなどといひ、或は八は大八洲の意であり、幡は三韓降伏の軍功を稱するの意であるともいひ、或は又、八（ヤ）は「彌」、幡は「昌」の意で、地名から起つたのであるともいつて、定まつた説がありません。

八幡神社で一番古いのは、宮崎宮、次ぎが石清水八幡宮であります。

お 稻 荷 様

稻荷神社といふのは、全國到るところにあります。このお稻荷様は、如何なる神でせうか。

それは京都伏見の官幣大社稻荷神社にお祭り申し上げてある倉稻魂命うかのたまのみことであらせられます。この官幣大社稻荷神社の神を、方々に稻荷神社として、お祭り申し上げてあるのです。

このお稻荷様、即ち倉稻魂命の御名は、宇迦之御魂命うかのたまのみこととも、その他いろいろに書きます。御父は須佐之男命すさのをのみことで、御母は神大市比賣命かみおほいちひめのみことであらせられます。經濟、食物、農業、産業、商工業を守護せらるゝ神として信仰せられます。

右のやうに、お稻荷様といへば、伏見の官幣大社稻荷神社の神と同じ神をお祀りしてあるのですが、しかし、世間には、何々稻荷などといつて、迷信的の妙な

ものを祭つた小さな社などもあります。これは本當のお稻荷様ではないのです。

金 毘 羅 様

金毘羅こんぴらさまといへば、子供でも口にする御神名で、世に有名であります。しかし金毘羅といふのは今日では正しい御神名でなく、正しくは金刀比羅ことひらであります。即ち香川縣（讃岐國）仲多度郡琴平町にある國幣中社金刀比羅宮がそれで、この神社を勧請して、各地にも金刀比羅宮があります。東京の芝區琴平町にある府社金刀比羅宮もその一つで、この神社は、東京の名社の一つといはれてゐます。

では、金刀比羅神様は、何神にましますかといひますと、大物主神おほもれののみかみであります。この神様を主祭神として、崇徳天皇様（七十五代）を合祀し奉つてあります。

大物主神とは、大己貴命おほなむちのみこと（大國主命）の御事であります。これを少しくはしくお話すれば、大己貴命の和魂にぎみたまを、大物主神と稱し奉るのであります。わが國の古

代の思想では、魂は二つに分けることができる、一つは和魂で一つは荒魂まらたまであるとするのであります。和魂は平和仁愛穩柔の魂のことであり、荒魂は勇武戰鬪猛進の魂のことであります。それで大己貴命の平和仁愛穩柔の御魂即ち和魂を、大物主神と名づけ奉つたのであつて、つまりは大己貴命（大國主命）の御事であります。大己貴命としては、出雲大社（官幣大社）にお祭りしてあり、大物主神としては、奈良縣の大神神社（官幣大社）や、金刀比羅宮にお祭りしてあるのであります。

元來、大己貴命は、神代において、この日本國の開拓につとめられた神で、この金刀比羅宮の在る琴平町の琴平山に本據を定められ、以て、四國、中國、九州等の開拓經營に當らせ給ふたと傳へられてゐます。さういふ關係から、その和魂を、大物主命としてお祭りされたのでありませう。

なほ、この大物主神といふ御神名は、詳しくいへば、大物主櫛おほものぬし毘魂命ひたまひのみことと申し上げます。

ところで、なせ昔は金毘羅といつたか。それは佛教の思想が混入してゐたからであります。即ち、梵語ばんご（印度古代の言葉）のクンビーラから來た言葉であります。このクンビーラ即ち金毘羅神は、佛教を護る善神であるといはれてゐます。

この金毘羅と金刀比羅（琴平）とが、よく音が似てゐるので、さてこそ、金刀比羅を金毘羅といひ、その御神名をも金毘羅大權現などといつたのであります。

ところが、明治元年に、神佛混淆（神社と佛寺とをごつちやにする。神と佛とをませこせにする）が禁せられ、わが國本來の神様であることを明かにせられたのであります。

さて又、金刀比羅宮に、崇徳天皇様を合祀し奉つてあるわけは、崇徳天皇様は御讓位後、保元の亂に、長くも讃岐國に遷幸遊ばされ、深くこの金刀比羅宮を御尊信あらせられました。かくて天皇様は長寛二年に、假の宮居に崩御遊ばされましたので、その翌年、當宮にお祭り申し奉つたのであります。

水天宮様

水天宮には、安徳天皇様を初めとし奉り、建禮門院、二位尼時子にのみあまを祭る。安徳天皇様は八十一代の天皇様にましまし、建禮門院は高倉平中宮たひらのちゆうぐうと申し上げ、八十代高倉天皇様の皇后にましまし、安徳天皇様の御母であらせられ、平清盛の御女で、徳子といふ御名であらせられました。二位尼時子は、平清盛の夫人で、高倉中宮の御母にまします。

東京市の水天宮は、無格社で、これは久留米市の縣社水天宮の分社であります。

護國神社

護國神社は従来の招魂社の改稱せられたるもので、その改稱は昭和十四年三月に行はれました。元來招魂社は、明治天皇様の厚き御思召により、明治元年五月に、京都に御創建せられたのが始まりで、この聖旨を奉體して、各地の藩主も、その地に招魂場（後に社と改む）を創立し、その地に縁故のある殉難忠死者の靈を祀りました。かういふ次第で招魂社は各地に創立され、従つてその改稱たる現在の護國神社も、そのまゝ各地に在るわけであります。

護國神社には社格はありません。しかし、一般の無格社とはその趣を異にし、内務大臣の指定せる護國神社は府縣社と同様の取扱ひをし、内務大臣の指定せざる護國神社は村社と同様の取扱ひするといふ定めになつてゐます。

軍神

軍神は、イクサガミといひ、皇軍の勝利を祈り、軍人の武運長久を祈るために祭る神であつて、いかなる神々を軍神とするかについては、古來いろ／＼の説があります。大體左の神々でせう。

撞賢木嚴之御魂天疎向津姫命(天照大御神の荒魂)

八幡大神

經津主神(香取神)

武甕槌神(鹿島神)

大己貴命(八千戈神)

神武天皇

建御名方神(諏訪神)

可美真手命(物部神)

道臣命

日本武尊

武内宿禰

素盞鳴神

住吉神

大山咋命(日吉明神)

坂上田村麿

なほ、乃木大將、東郷元帥、廣瀨中佐、橘中佐も明治以後の軍神であり、その他最近の大東亞戦争には、特別攻撃隊の九勇士、加藤少將なども軍神であります。

菩 薩

昔は神に菩薩號ぼつさつごうを奉つたのがあります。例へば八幡大菩薩などと稱します。これは昔の神佛習合、神佛合體のときの遺物であります。菩薩とは、佛教修行者の中の先覺者のことで、先覺者ではありませんが、佛陀そのものではありません。つまり佛陀よりも下位にあるものであります。

かゝる菩薩號を、日本の神に奉るのは、神を佛よりも下位に置くものであつて、その不當であることはいふまでもありません。それで明治になつてから、神佛は明確に分離され、神に菩薩號を奉るなどいふことは禁じられたのであります。

權 現

神に權現號ごんげんごうをつけたのも、昔の神佛習合の結果であります。權現とはどういふ意味かといひますと、權は權かりで即ち假りであつて、佛がかりに現はれるといふことでもあります。つまり、印度の佛が、かりに日本の神となつて現れたといふのであります。

それで、權現といへば、印度が本で、日本は末、佛が本で、神は従といふことになります。かゝる思想の誤りであることは明かであります。さればこの權現號も、菩薩號と同じく、明治以來、神につけることを禁じられたのであります。